

アニズム時代

岩田慶治・著 法藏館 一九九三

上野
浩道

岩田慶治さんの本は、いつ読んでも心が洗われ、やすらかな気持ちにさせてくれる不思議な魅力をもつていて。それは私たちがかって経験したものにかかわらず、すでに忘れてしまつた懐かしい原風景を蘇らしてくれるからである。

の枝がオイデオイデをしているとかいつたように、ものにも自分と同じように心や魂が存在していると思う心性のことである。それは、ものにも顔があるという意味で心理学では相貌的知覚などと呼ばれ、ものと自分といった自他の区別のできぬ未分化の状態で、近代の進歩史観からみれば未熟な幼児や未開社会の人々の思惟形態として低

くみられてきたものである。

しかし、岩田さんは文化人類学者として『草木虫魚の人類学』（淡交社 一九七三年 講談社学術文庫）以来、新アニミズムの立場から、このようない原初的世界こそが文化の基底にあつて創造性をもち宇宙（コスモス）を形成していることを一貫して説いてきた。本書では直接子どもの世界について述べていない。だが、豊かなフィールドワークの成果をもとに東南アジアの人々の生活を生き生きと示しているその世界は、まるで子どもたちの世界を表しているかのようである。また、タイやその他の国で稻には他の植物と違つて魂があるという稻魂の行事や思想などの分析は、昨今の米騒動と重ねあわせて読むと、米に特別の感情を寄せられるわれわれの心性を解き明かしてくれる内容も含んでいる。

岩田さんのテーマは言語化される以前のカミの

世界を扱つてゐる。それこそがあらゆる宗教や芸術の原点であるとする立場である。ところが、それを言葉であらわさなければならぬというジレンマがつきまとう。そこで、最近、もののかたちと言葉とが同時に誕生し、自分とともに共存して表現できる「絵で考える」という手法を考えてくれる。人類学では参与的観察といつて相手に寄りそつて本質を捉える方法があるが、岩田さんはそれを創造的に描いていく。本書でも、言葉のぎりぎりの表現として詩の形式で述べられていたり、前景、遠景の風景画を見るような画面の描写が随處に出てくる。

前作の『花の宇宙誌』（青土社 一九九〇年）では、花と人間との関わりから宇宙と風景について美しく描かれ、特に、魂の風景として幼児期の原風景のもつ重要性について説かれている。つまり、幼児体験のなかで刻みこまれた忘れえぬ風景

こそが自分を自分として証拠づける重要さをもつてゐると言ふのである。

岩田さんの最近の一連の作品には人生という時

さんは、人間と自然の共生をはかる上でわれわれのからだの作りそのものを変えたいと述べている。これはもう、一つの教育論となつていて

(お茶の水女子大学教育学科)

新現代幼兒教育研究會

第十五回 オンステージのお知らせ

幼稚教育音楽リズム発表会

日時 八月二十一日(日)

十一、三〇分、四〇分

場所 十文字学園講堂

〇三
（三九一八
一六六八

事はしないが、泰山木の枝にぶらさがつたり、木蓮の肌に触れていると触覚を通して木々の返事がかかるてくるという。そして、自然のなかの応答や感覚のやりとりにアニミズムの出発点があるのではないかと岩田さんはみる。近頃、教育の世界で共生ということが話題になる。人間と人間、人間と自然の共生である。昨年の日本教育学会のシンポジウムのテーマは共生であった。本書で岩田